江戸後期の関東詩壇ー市河寛斎を中心にー

台湾大学　朱 秋而

江戸時代の漢詩の世界では、徂徠学の影響で十八世紀の前半は古文辞格調派の詩風が一世を風靡し、「高華雄渾、古雅悲壮」の盛唐詩が理想とされ、詩人たちはこぞって模倣した。しかし明和期に入ると、大坂混沌社の詩人が現実に眼を向けない空疎な表現に疑問を持ち始めた。やがて江戸の山本北山が天明三年（一七八三）に『作詩志彀』という古文辞派末流の偽唐詩を厳しく批判し、現実を重視する清新性霊詩を提唱した。

ちょうどこの時期古文辞格調派詩人だった市河寛斎が清新性霊の詩風へ転換し、江湖詩社を開き、詩人と等身大の江戸の現実と日常を見つめる作品が多く詠まれるようになった。南宋の三大詩人の詩風が流行し、寛斎は特に陸游に心酔した。中晩年に平凡な生活や家族をテーマにした詩を他の詩人よりたくさん詠んだといわれる。本報告は新しい詩風の集大成といわれる関西の菅茶山と陸游の作品との比較を通して、関東詩人市河寛斎の詩風を再検討したいものである。